教師のための保育内容研究

社会

酒井忠雄

一、「保育内容・社会」の時間に

学生「この講義は、小学校の社会科教材研究の単位にもなるのですね。」

先生「そうです。幼稚園教諭免許状のためには、保育内容研究として、健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作の各単位を必要としますが、その半分までは、小学校教材研究の単位で代用できるわけです。したがって、小学校の教材研究も、常に幼稚園の各領域について、解説しなければならないわけですし、幼稚園保育内容研究の方も、小学校の各教科に関連することはのべなければならないわけです。」

学生「小学校の社会科と、幼稚園教育内容の社会とは、どうちがうのですか」

先生「全然、ちがうと思いますね。小学校の社会科では、ある生活上の基本的な態度・能力を身につけさせる為に、ごっこ遊びもさせるわけですが、幼稚園では、ごっこ遊びそのものが、うまくやれねばならないわけです。小学校では、社会科として、一つの知識的なまとめができるわけですが、幼稚園では、そんなまとめよりも先に、ごっことして、集団的な行動そのものを出来るようにすることが大切なのです。」

学生「社会科はあくまで社会科で、「社会」はあくまで「社会」であるというわけですか。」

先生「社会性をのばすといういい方をすれば、いずれも同じものでしょうが、社会科では、それを知的な論理のくみ立ての上で、わからせてゆくし、「社会」の方は、行動すること自身が社会性を育てることになるということです。」

学生「まだ分りません。社会性を育てるといういい方が、ハッキリしないのでしょうか。〝幼年の社会性〟という本をよみましたが、そこでも書いていられる先生によって、社会性の定義が皆ちがうのです。」

先生「そうだと思います。第一、社会という概念が、社会学者のいる数だけあるといって、笑い話にされるほどです。

しかし、これはまた、日本独特の景況かも知れません。つまり日本人には、まだ西欧の人々が、ソシアルとか、ソサイエティということばに感じとっているような実態がないために、それを社会ということばで訳してみても、どんなイメージも浮かんでこないからでしょう。日本の大学出のことを世間知らずといいますが、

この世間などいうことばには、日本的なニュアンスがつよいのですが、ソシアルということばに一番近い感じのものではないでしょうか。世間が笑うというとき、日本人が感じとっているものは、自分の外に、自分の力だけで、どうにもならないものがある。しかもそれは人と人との関係の重なりの上にできている。そして、私もその一員なのだというもの、更に進んで、私という、つまらぬこの一員をぬいては、その世間がなり立たないというもの。——こうした考え方が社会だと思うのですが、日本人の場合は、この後半の方の考え方がぬけているのです。前者が協同性で、後者が自主性でしょう。そして、この二つが統合されたものが、社会性でしょう。」

学生「分ったように思いますが、社会性を育てるということになると、そのいずれもに力を入れることでしょうか。」

先生「いずれも、というとき、この二つが、別々に考えられているからです。自主性は、他があって始めて自主性であり、協同性は、協同する単位としての自主があって、はじめて協同なのです。育てるというのは、時には自主性ばかりのばすようになるけれど、それが本当に自主性としてのびる為には、それをとりまく人間関係の中で、自主が自覚されていった時で、同時に協同性、集団性もついてゆくのだと思います。」

学生「わがままな子がいる。それは社会性がないということが分りますが、その子をどうすれば社会性をもたせたことになるのか、——そこがハッキリしないのです。」

先生「わがままということが、社会性をもっていないということ、その第一は、その子のもっている自主性というものから見ると、常に他に対して、自己を主張しているようだが、それが反感をもたれ、自己をスムースにつきとおせないという意味からして、自主、——つまり自己が自己のやっていることに、ハッキリした自信をもっていない。またもてないのである。その意味で、わがままは、自主性がない自己中心性なものである。協同という点からいえば、自分の方ばかりが見えていて、心の中を占めているのは自分の慾求ばかりで、それを実現すべき場—人間（人と人との間）がハッキリ見えていない。したがって、その中にはまりこんで、自己を生かすことが、どうしたらよいのか分っていない、すなわち、協同性がないのである。

だから、自己中心性から、どうして、自主性へ移ってゆくものか。どんな方法、経路が、一段上の自主性へ、みちびき上げるのか。とくに、その目の前にいる幼児の場合、それをひきあげる手段のうち、どんなものが可能か。——考えられる可能のうち、どれが一番ふさわしいか。——こうしたいろいろの観察が必要になってくる。叱って悪いとはいわない。叱ることが、反撥を感じさせ、自己を更にみつめることによって、一歩前進する場合もあるだろう。しかし威圧によって前進した社会性は、また威圧によらねば、次の一歩を進めない場合が多い。これでは、自主性をのばそうとして、それをつんでしまうのである。」

学生「先生の説明では、こうしろというこ

とがありません。」

先生「そうですよ、君が「わがまま」とレッテルをはっているその子どもが、果して、わがままなのかどうかを、私自身たしかめてないからです。また、なぜ「わがまま」と称せられるのか、どうして、そうなったのか、も分っていないから、一般的な答えしか出ないわけです。」

二、ある幼稚園にて

園長「先生は、大学で「社会」を教えていられるとのことで、――私など、音楽や絵画で、幼稚園教育が好きになって二十年来やってきたのですが、社会というのが別けられたのですが、サッパリ分りません。」

先生「とりあえず、こう考えたらどうでしょう。皆さん幼稚園の先生が、幼稚園教育を終って、小学校へあげようというとき、どこまでできている子をよいとされるでしょうか。

画も教える、製作もさせる。リズムもやらせる。しかし、それらをつつんで、ひとりで学校へゆける。自分が呼ばれたら「ハイ」と答えられる。毎日学校へゆけるくらい丈夫になる。自分の困ったことは、先生にいうことができる。というふうにあげてゆくと大分あるでしょうが、要するに、幼いなりに一人前になれるようにしてやらねばならない。そして、いくらリズムがよく出来ても、歌が上手にできても、こうしたことができないと、幼稚園を出たともいえないし、小学生ともいえないでしょう。その意味で、幼稚園教育の基本的なものを、とりあげてゆくと、教育要領に出ているような項目になるのではないでしょうか。」

園長「そういわれるとそうですが、そんなことは、音楽をやることや、リズムをすることと同じくらいに大切というより、それ以上に大切なことではないでしょうか。」

先生「実は、大切なことなのに、それが意識して今までとりあげられなかった。知らぬ間にやってきた。それよりも、一つ一つこれが大切だと、とりあげて、たとえば一人で学校へゆける、という一つのことにしても、どうしたら、どのような順序で、幼稚園教育の中にとりあげていったらよいかと考えたのが、今度のような、六領域に分けて、考えてゆこうとしたのです。

絵画や製作は、最初にこうしたことをやらせて、その次に初歩的な練習をして、というように順序も方法も、よく調べられているのに、幼稚園の最終、最高目標であるところの、社会的な成長ということには、あまりに無関心だったわけです。」

園長「そういわれると、本当にそうですね、ひとりで園へくるまでにするには、その子にそんなことができるのだ、という安心とほこりを持たせてやらねばならない。その為にいろいろ苦心しました。いつまでも親つきの子どもではどちらもこまります。そして、それこそ、幼稚園の大切な仕事ですね。」

先生「だから、六領域に分けたけれど、「社会」の部分は、他の五領域とちがって、ちょっと格が上なのです。しかし実際にやる場合には、他の五領域の活動の中で一しょにやらねばならないし、そうでな

ければ、社会としても効果もないわけで、音楽のときも、製作のときも、社会の指導――ひとりでやる、友だちと仲よくする、あとしまつをする――といったことがおこなわれねばなりません。その意味で、六領域として、一しょにしてあるわけです。」

園長「この頃、社会性の調査などいって、大学の学生さんなどがよく来られますが、何を調べられるのか、よく分らなかったのですが、子どもの会話を録音してかえったり、けんかしているところばかり、映写機でとってかえったりされますが……」

先生「けんかなど、一番社会性の発達が、よくわかるわけなのです。けんかが、どのようにして起ったか、わがままな子どもがいたからか、その子どもは、けんかによって、自分でないもの、自分の意志に抵抗するものに出会うことによって、自分はどれだけのものか、他がどんなやつか、こうしたことを知ってゆくわけで、先生が、ひとりでできる――ということを考えられる場合、ひとりでできる行動をなり立たせているのは、このしっかりした自己をもっているか、どうかなのです。自己中心性ということがいわれますが、それが悪いのでなく、それがある為に、だんだん外界の事件、人とのつき合いを通して、ほんものの自分が分り、その自分でできる自信をたかめてゆくのです。製作も、リズムも、すべてこの為にあるのだと思います。」

園長「それではたいへんですね、朝の視診から、園からかえるまで、社会の指導をしていることになりますね。」

先生「そうです。そうです。幼稚園の教育全体が、社会の指導なのです。ところが、まだその研究がじゅうぶんでなく、もっと心理学や教育学の先生方にも研究してもらうとともに、教諭のかたがたが、しっかりそうした観察をつづけていただきたいと思い、お願いに上ったわけです。」（大阪学芸大学）

自然

小松原次郎

一、「自然」

イギリスには nature という、古い歴史をもった雑誌があり、日本にも新しいが、自然という雑誌があり、ともに自然科学を取り扱う雑誌である。自然科学のことを、自然と呼んだ時代があり、それが natural history（博物）と natural philosophy（自然哲学）とに分れ、後に博物・物理・化学とに分れ、今は生物・地学・物理・化学その他に分れ、数百の種類に分けることもできる。

個体発達は系統発達（人類の歴史的発達）